

2015年度学院留学 研究成果概要

種 別：学院留学（短期）
所属・職・氏名：国際学部・教授・田村 和彦
研究課題：ドイツ近現代の文学・思想と社会 身体論と（ポスト）コロニアリズム
を中心に
留学期間：2015年3月20日～2015年9月16日
留学先：ドイツ ベルリン市
ベルリン自由大学（ガブリエレ・ブランドシュテッター教授）

研究成果概要

今回の学院留学においては、「ドイツ近現代の文学・思想と社会 身体論と（ポスト）コロニアリズムを中心に」をテーマとして、主にベルリンを中心に調査研究を行った。受け入れ先のベルリン自由大学、ガブリエレ・ブランドシュテッター教授は国際研究センターInterweaving Performance Culturesの所長で、モダンダンスをはじめとするパフォーマンス・アート研究において世界を代表する研究者である。同教授の受け入れによってベルリンでの長期滞在が可能になった。

ベルリンでは以下を重点にして集中的な調査・研究を行った。

- ① クラインガルテン運動の起源と展開
- ② 菜食主義 (Vegetarianismus) のドイツでの歴史的展開
- ③ ベルリンにおけるコロニアリズムとポストコロニアリズム

まず①については、筆者には「ドイツ庭ものがたり」と題した10年来の連載エッセイがある（関学出版会・PR誌「理（ことわり）」に連載）。それ以外にドイツのクラインガルテン制度の歴史を体系的にまとめるべく、専門研究のテーマとして設定してきた。今回のベルリン滞在は文献調査とフィールドワークによってこの研究のバックボーンを得ることを目的にしていた。文献調査はベルリン自由大学図書館、ベルリン州立図書館、ベルリン市立図書館において行った。特にベルリン州立図書館（フリードリヒシュトラッセ）は、17・8世紀から1945年以前の古い文献・雑誌を所蔵しており、クラインガルテン関係の調査でも十分な成果が上がった。具体的には *Gartenkunst*, *Gartenstadt*, *Gartenwelt*, *Laubkolonist-Kleingärtner*, *Vegetarianer*, *Eigene Scholle*, *Heim und Garten* などの定期刊行物が貴重で、19世紀後半から戦前にかけて出されたこれら雑誌のバックナンバーから膨大な量の閲覧とコピーを行った。6月のエアフルト出張、7月のライプチヒ出張、8月のドレスデン出張もクラインガルテン研究に関わるもので、特にライプチヒのドイツ国立図書館では、ベルリンの図書館を補完する文献調査を行った。一方で、ベルリン周辺にあるクラインガルテン施設、および1920年代のブルーノ・タウトの手になる労働者住宅を集中的に現地調査できたことも大きな成果であった。クラインガルテンはもともとライプチヒに発する市民園芸の施設で、同地については二年前の短期滞在中に一定程度調査したが、今回はベルリン市内および周辺に点在する大規模なクラインガルテン施設（1000区画を超えるものがいくつもある）を実際に踏査し、写真撮影、作図などを通じて資料を集め、フィールドワークを行った。注目したのは旧東ベルリンと旧西側における対照的な利用方法で、

たとえば Treptow 地区、プレントウアーヴァルト最寄りでは、ベルリンの壁の跡地の道路を挟んでいずれも 100 年近くの歴史を持つ歴史的なクラインガルテン地区が現存し、いまも別個の Verein (協会・クラブ) に所属する 2 群の菜園地区は、利用者も、利用方法も、外観・設備も異なり、歴史的、政治的な変遷の沿革を知るのに有用だった。同じく、ベルリンに点在するタウトの住宅群を実際に踏査して、この計画が住宅のみならず、庭園、緑地を含む都市計画の一環であることを強く印象づけられた。なお、「ドイツ庭ものがたり」では滞在中にクラインガルテンを扱ったエッセイを新たに 2 本執筆し、掲載した(「ミツバチの教え」2015 年 7 月、「リンゴの福音」2015 年 10 月にそれぞれ掲出)。エアフルトの egapark (東ドイツ時代に社会主義圏最大の庭園展が行われた敷地がそのまま保存・公開され、敷地内に「ドイツ庭園博物館」がある)と、ドレスデン近郊のドイツ最初の田園都市ヘレラウの訪問もこの研究に関わるものである。ドレスデンでの文献調査は市立図書館に限られたが、所蔵される郷土史的な資料の中から、市内のクラインガルテンのクラブによる 100 年史をまとめた資料集などが閲覧できたことは有用だった。

②は、①の研究を進める中で滞在中に深化されていったものである。菜食主義運動は 18 世紀後半にイギリスのシェリーらの影響を受けてドイツでも徐々に広がっていったが、特に 3 月革命 (1848 年) 後の政治的挫折が「生活改革運動」として個人化・内面化されていくのと連動していることが興味深い。ドイツでこの運動を担ったハーン Theodor Hahn、バルツァー Eduard Baltzer らは宗教的な自由思想を抱く改革主義者で、食や医療、健康の面から生活改革運動を主導していく。それはクラインガルテン運動とも連動する近代批判の運動として、主に都市生活者の中に広範な支持を集めていくが、いくつもの定期刊行物によってその思想が広められたのも特徴的である。ベルリン州立図書館およびドイツ国立図書館 (ライプチヒ) では、Vegetarianer, Vegetarischer Rundschau, Vegetarische Warte など、19 世紀末に刊行された定期刊行物を中心にこの運動の展開を調査・研究した。筆者の従来からの研究テーマとして 19 世紀末から 1920 年代にかけてのドイツの生活改革運動 (ワンダーフォーゲル、衣服改良、反アルコールリズム、ヌーディズム、菜園運動、環境保護、郷土保全など) があるが、菜食主義がこの運動に全般的にかかわり、強い影響を与えたことが今回の調査で強く印象付けられた。ベルリンの北約 30 キロに位置するオラーニエンブルクに現存する果樹園コロニー・エデンは、19 世紀末に菜食主義者の同志が集まって切り拓いた共同入植地で、このコロニーは大戦間期、ナチズム、東ドイツ時代を通じて維持され、東西ドイツ統合後の今も存続している。「菜食主義」という信念がイデオロギーを超えて支持され続けたこと、さらに EDEN のブランドが菜食主義をうたった食品メーカーとして今なお存続していることが特徴的である。100 年以上続くこのコロニーを実地に訪ね、小規模ながらその歴史を展示する博物館に入館して、実際の運営メンバーにインタビューを行ったことも有意義であった。

③はドイツの植民地主義に関する研究である。コロニアリズムおよびポストコロニアリズムについては、すでに世界的には文学研究、思想研究において大きなブームとなつてから久しく、かなり掘り下げられた分野でもある。ただし、ドイツについていえば、1918 年の第一次大戦の敗戦をもってドイツの海外植民地がすべて失われるとともに、「東」地域の領土が大きく割譲されることで、外面的には目立たず、あまり積極的に取り上げようという動向が見られなかった。ヒトラーによる東方への領土拡大や海外進出が「失われた」植民地の野心を持っていたことはもちろんだが、その後のドイツの歴史・文化研究の中では、しいてコロニアルな側面を取り上げることはされてこなかった。しかし、2000 年以降、ドイツ史を貫くコロニアリズム的な擬制

とその残存を積極的に取り上げようとする姿勢がドイツの学会でも目に付くようになった。たとえば、2004年刊のAlexander Honold/Klaus Scherpe編によるMit Deutschland um die Weltがその成果である。「植民地時代における他者の文化史」と副題のある同著は、1869年から1918年までのドイツ帝国による植民地獲得と、それに関わる文化や学問のありようを編年体で取り上げたものだが、この時代の文化を見るうえできわめて示唆的である。筆者はすでにそれに触発されて、専門のトーマス・マン研究でもコロニアリズムを視座にいくつかの論文を書いているが、当研究期間中は、ベルリンに残存するコロニアリズムの遺産に注目して調査を行った。一つは、ベルリンのWedding地区に残る地名である。この地区には、アフリカ通りという主幹通りのほか、トーゴ、ギネア、カメルーン、ザンシバル、オターヴィ、ザンベシ、トランスヴァールなど旧ドイツ植民地から取られた地名が通りの名前に付けられ、カール・ペータース、ナハティガルなど植民地開発者の名前を冠した通りもある。第二次世界大戦後も西地区にこの住所がそのまま残っていたのは奇妙でさえある。一方、ベルリンを世界に冠たらしめさせた博物館や学問制度にもコロニアリズムの明瞭な痕跡が残っている。前者の代表は美術館島のペルガモン博物館に収められた、小アジアの古代都市ペルガモンからそのまま移築した大祭壇やバビロンのイシュタル門の遺跡であろう。ベルリンの中心部に設けられた博物館の巨大な蒐集システムそのものがコロニアリズムの精華ともいえる。一方、学術の分野では、ローベルト・コッホの切り拓いた細菌学・衛生学は、ドイツの植民地政策の重要な後ろ盾となるとともに、植民地を失って以後もドイツに「植民地的な威信」を与え続けることになる。こうした、学術の中でのコロニアリズムの痕跡に関する考究については、今後の研究につなげるためのいくつかの端緒を得た。

(以上)